

## クラゲ、拍動する浮遊生活者

上野行灯

私は大学で浮遊生物学を講義し、浮遊生物の一つであるクラゲの生態や生活史を研究してきました。しかしながら、世間ではクラゲが誤解されているようなので、少しクラゲの身の上話をさせて下さい。

さて、クラゲは浮遊生物と呼ばれています。浮遊生物とは、水面や水中に浮んで生活している生物の総称で、世界共通語でプランクトンと呼ばれ、植物も動物も含まれます。植物ならば植物プランクトン、動物ならば動物プランクトンという単純明瞭な呼称は、彼らの水に浮かぶという生態が決め手です。

水面や水中に浮かぶことは、水より軽いか、又は同等であらなければなりません。クラゲは海水よりも比重が大きく、絶え間なく傘を拍動して浮かんでいます。拍動を止めると、クラゲといえども海底や深海へ沈んでしまいます。例外は必ずあるもので、水よりも軽いカツオノエボシやギンカクラゲは体の一部に空気を含むフロートを発達させて水面生活をし、拍動を不要とした少数派なので、今回の話で触れないことにします。このようなアウトローは必ずいるのが世の常でしょう。

クラゲは沈んでは生活ができません。水面近くにはクラゲの餌が沢山あり、豊富な餌を採り込み消化して、体を成長させ成体となり、子孫を残すことまでできます。浅い海底に沈むと海底との摩擦で体が損傷します。数百メートル以深の深海にまで沈むと、水温は数℃と大変に冷たく、代謝活動が鈍りますし、餌も少なくなり、生活できません。深海クラゲというものもありますが、彼らは深海の環境に適応した特殊なクラゲで、なまぬるい表層付近では生活できない生物です。これもまたアウトローの一派で、ここでこだわって話をしますと混乱を招くので、前述のカツオノエボシなどとまた別個に話をしましょう。

さてさて、クラゲは浮くためだけに傘を拍動しているわけではありません。傘の周辺に群生する触手は拍動の水流で水中を大きく揺れ動きます。この触手には、カプセル状をした多数の刺胞が存在し、それに小さな動物プランクトンが触れると、刺胞中に納められている刺糸が飛び出し、動物プランクトンの体に刺さり、毒液までも注入します。毒液で体の動きを止められた動物プランクトンは、収縮する触手で口に運び込まれ、その後胃中で消化されてクラゲの栄養となります。拍動は、泳ぐためだけでなく餌を捕獲する役割も持っています。

また、クラゲは拍動することで、栄養を体の隅々まで運び、老廃物を運び出します。心臓を持たぬクラゲですが、傘の拍動はクラゲの心臓の役割も果たしているのです。

浮かんで遊んでいるように見えるクラゲですが、彼らは極めて合理的な生活戦略を選択し、数億年間を環境に適応進化して浮遊生活をしていると言えるでしょう。

浮いて遊んでいるクラゲになりたいと羨んでも、そうは問屋が卸すものではないのですね。なんだか、夢を壊してしまったら、悪しからずです。

夢のない話の締めくくりに、私の水母句をひとつ記します。

溜息の白い一滴みずくらげ 行灯